

山梨県韮崎市神山町の民家集落について

—平面形式による民家の分析—

Keywords

山梨県韮崎市 平面形式
文化財総合的把握モデル事業 編年・復原図

1. 研究背景と目的

韮崎市は山梨県の北西部にあり、釜無川と八ヶ岳から流れる塩川の合流付近に位置する。自然が多く、山に囲まれた民家、田んぼなど昔からの風景が多く残る。平成20年より文化庁の文化財総合的把握モデル事業の対象として、調査が実施されることになった。今回は特に民家について配置形態や平面形式の実測調査を行い、現在と建設当初の間取り形式や特色を明らかにしたいと思う。

本研究は韮崎市民家の特徴を明らかにし、価値ある民家の保存に役立てる事を目的とする。

2. 研究方法

韮崎市にて、現存する民家の実測調査・間取り調査を行う。今回は神山町内における鍋山、北宮地、武田、御堂の4集落を調査。(図2) それより平面図・断面図・配置図・復原平面図を作成し、分析する。民家ごとに比較を行い、配置や建設年代によって民家にどのような影響が現れているか考察する。

3. 韮崎市について

韮崎市は山梨県北西部、甲府盆地の北西端に位置する。白山城跡、新府城跡や武田八幡宮をはじめとする史跡が多く所在し、武田発祥の地、そして終焉の地である武田の里として知られている。旧来より米・麦・養蚕を主体とする農業生産が展開されてきたが、現在は兼業化が進んでいる。昭和29年に町村合併し、韮崎市となった。

表1 韮崎市の現状

人口	33,801人
男	16,743人
女	17,058人
世帯数	11,456世帯
面積	143.73km ²

平成17年国政調査より

図1 韮崎市の風景

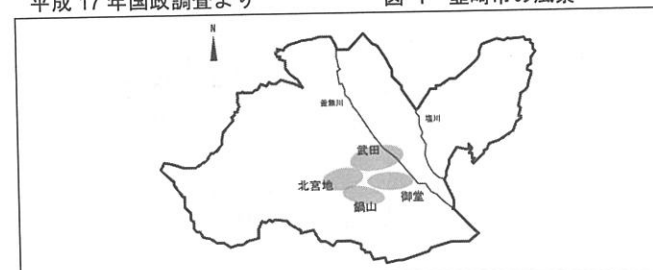


図2 韮崎市概要図

4. 実測調査

2009年8月24~26日、11月15日に鍋山3棟、北宮地4棟、武田1棟、御堂1棟の4地域にて9棟の民家調査を行った。なお、9棟中1棟は配置図のみの調査。(表2)

表2 調査対象民家

◎石原喜直氏宅	◎駒井教雄氏宅
◎内藤重明氏宅	○向山公男氏宅
○秋山喜昭氏宅	○内藤ますえ氏宅
◎樋口一彦氏宅	○石原喜磨氏宅
内藤猛氏宅	

◎:平面、断面(配置)

○:平面、配置

無印:配置のみ

Kei Karasuyama



K06035

鳥山桂

4-1. 調査対象地

今回調査を行った集落は神山町に位置し、武田家に縁のある4つの集落である。北宮地は武田八幡神社門前の集落で、参道を中心に民家が建ち並んでいる。武田は武田家初祖である武田信義の居館跡の発掘が進む集落、鍋山は信義が築いた白山城の根小屋集落と推定される集落、御堂は信義の菩提寺である願成寺を中心とする集落である。

5. 分析

9棟のうち平面形式の実測調査を行った8棟、及び先行研究である関口欣也『山梨県の民家』(1982)にある韮崎市他集落の4棟について表4に示す。

5-1. 集落ごとの特徴

集落ごとに大きな違いは見られなかったが、北宮地については表4より、他の民家と比べると、桁行きが短い民家(例:表3中9、10)が見られた。

5-2. 屋根形式

今回調査を行った民家は、8棟中7棟の屋根形式が切妻造だった。よって神山町の4集落では切妻造が一般的だったと考えられる。しかし先行研究にある民家(例:1,4,6,7)は入母屋が多くみられ、神山町と他の地域で屋根形式の違いが見られた。(表3)

また多くの民家で養蚕が行われており、2階を広く使用するために切妻造が用いられたと考えられる。2階で行う他に、養蚕の専用付属棟(例:3,9)、3階建ての養蚕の為主屋(例:12)もみられた。(表3)

先行研究より煙出の発生は遡っても18世紀末、普及は19世紀に入ってからとあることから、石原喜直氏宅の屋根の煙出は後補と考えられる。(図3)

5-3. 平面形式

梁間が短く、桁行きが長い民家が多い事が分かった。

表3 屋根形式・養蚕について

戸主名	屋根形式	養蚕	場所
秋田昌收	入母屋	不明	不明
石原喜直	切妻	○	不明
駒井教雄	切妻	○	専用付属棟
小泉國晴	入母屋	不明	—
内藤重明	切妻	○	1階・2階
堀井かおる	切妻・入母屋	○	不明
名取健男	不明	不明	—
向山公男	切妻	○	2階
秋山喜昭	寄棟	○	専用付属棟
内藤ますえ	切妻	×	—
樋口一彦	切妻	○	2階
石原喜磨	切妻	○	地下・1階・2階・3階

■ 先行研究記載の民家

図3 煙出写真



表4 実測調査結果

戸主名	地域	建立年代	年代の根拠	本家・分家	当初規模(間)		大黒柱		側柱高 (尺・寸)	棟木高(尺)		前		後	
					桁行	梁行	断面(mm)	ずれ		2階床面から	GLより	折置組	備考	折置組	備考
1 秋田昌收	円野町	17世紀後半	社家としての家格、様式特徴	不明	10.5	4	155×150	不明	8.1	不明	不明	不明			
2 石原喜直	武田	18世紀前半	聞き取り	分家	9.5	4	319×379	×	10.0	9.0	18.1	○		不明	備考
3 駒井教雄	鍋山	18世紀後半	間取りの特徴	(移築)	9	3.5	(135×135)	○	9.4	12.2	22.2	○		○	
4 小泉國晴	穴山町	18世紀後半	破産失の年号、様式特徴	不明	9.5	5	350×350	×	12.1	不明	不明	不明		×	
5 内藤重明	北宮地	19世紀前半	聞き取り	本家	10	4	260×310	○	7.1	13.6	22.4	—	2階改造	不明	
6 堀井かおる	穴山町	19世紀前半	間取りの特徴	(移築)	9.5	4.5	280×280	不明	12	不明	不明	不明		—	2階改造
7 名取健男	徳坂町	19世紀半ば	間取りの特徴	分家	8.5	4	220×220	不明	11.8	不明	不明	不明		不明	
8 向山公男	鍋山	明治19年	聞き取り	本家	9.5	3.5	300×350	○	—	—	—	—	側柱が2階軒桁まで	不明	側柱が2階軒桁まで
9 秋山喜昭	北宮地	明治39年	聞き取り	本家	6.5	4	見えず	—	—	—	—	—	—	—	—
10 内藤ますえ	北宮地	明治39年	聞き取り	分家	4	3	見えず	—	—	—	—	—	—	—	—
11 樋口一彦	御堂	明治末	聞き取り	本家	8	4	320×320	○	7.9	9.5	19.7	○	側柱が2階軒桁まで	○	まねき屋根
12 石原喜磨	北宮地	明治末～大正初期	聞き取り	分家	11	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—

■ 先行研究記載の民家

図4 石原喜直氏宅 外観・ドマ写真



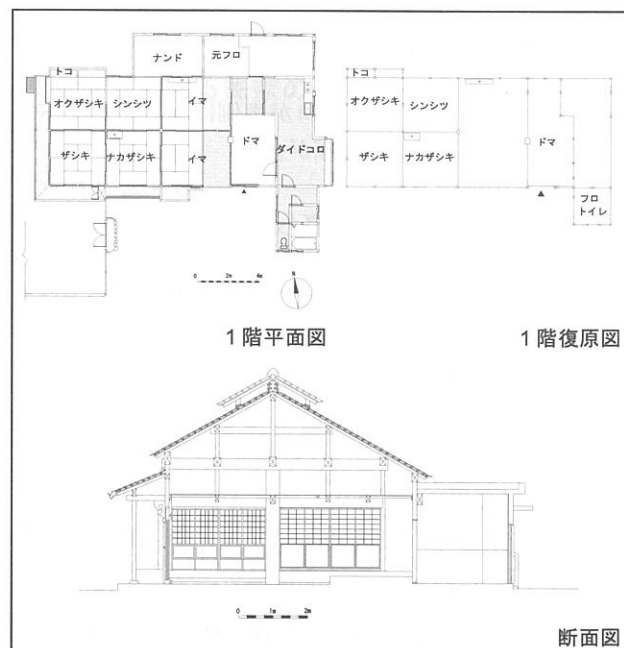


図5 石原喜直氏宅
(18世紀前半建設)

5-4-2. 駒井教雄氏宅

鍋山にあるこの民家は推定建設年代が18世紀後半で、移築して来たものと伝わる。現在の間取りは、表3室、裏3室の桁行4列、上手妻側2室の構成をとる。

間取り調査より、北側の縁の設置、フロ・トイレの設置、ダイドコロの移動など今まで3回程改築をしていることが分かった。ドマの縮小は生活を営む場から玄関ドマへと機能の変化によるものと思われる。これらの聞き取りと、ナンド・イマの柱切断跡及び束立ての位置より、現在の主要構造部規模は桁行9間梁行4間だが、建設当初は桁行9間梁行3.5間と推察される。

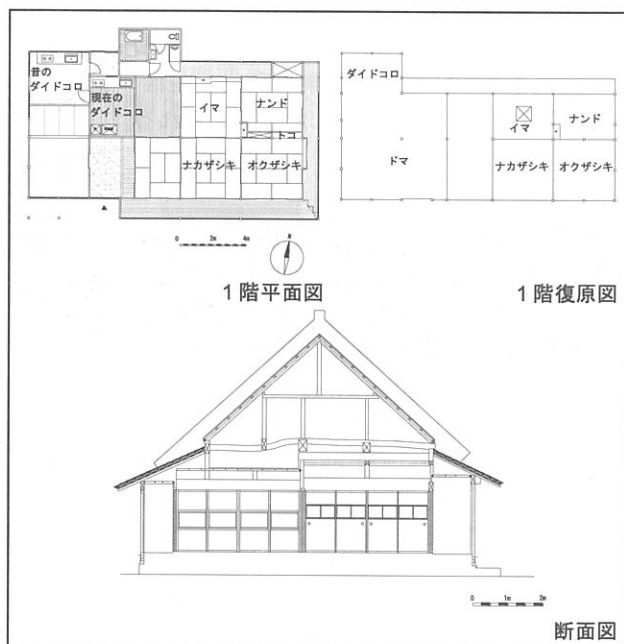


図6 駒井教雄氏宅
(18世紀後半建設)



図7 駒井教雄氏宅 外観・イマ写真

5-4-3. 樋口一彦氏宅

御堂に位置する民家で、建設年代は明治末だと推定される。現在の規模は桁行8.5間梁行5間、間取りは表2室、裏3室で、桁行3列、上手妻側2室の構成をとる。

ドマ東側から敷地に沿ってウマヤ・クワ倉庫・倉庫・トイレの突出（つや）が伸び、主屋はL字型をしている。間取りにより、改築はドマの縮小、フロの改装程度と思われる。折置組で、裏側は葺き降ろしている。



図8 樋口一彦氏宅 外観・ドマ写真

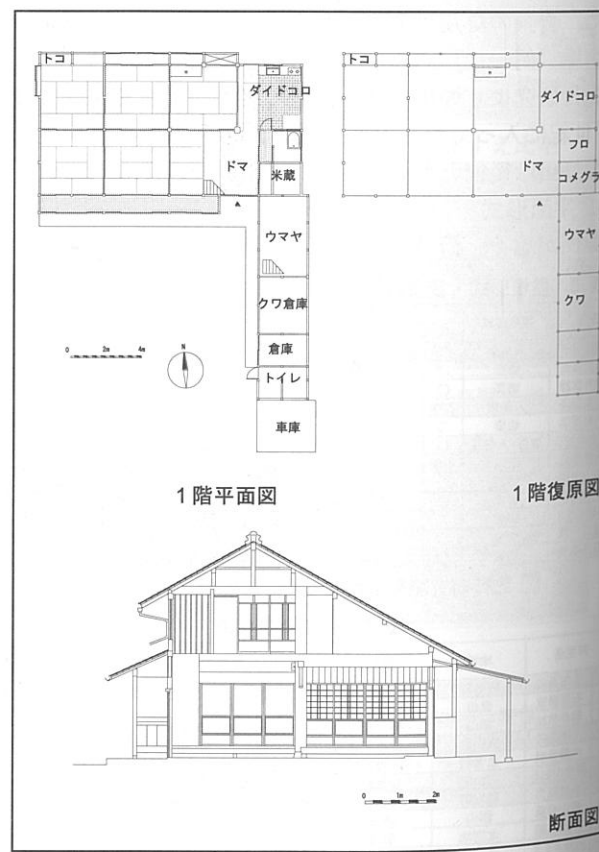


図9 樋口一彦氏宅
(明治末建設)

6. 変遷

今回調査を行った民家を建設年代ごとに並べ、平面形式の変遷を明らかにする。

6-1. 編年

各民家の建設年代の推定を行った。間取り調査により建設年代がわかった民家は7棟。間取り調査、平面形態の特徴より1棟の推定を行った。それらと先行研究をもとに編年指標（表5）を作成した。その結果、18世紀前期から大正初期にかけて建てられた民家が現存していることが明らかになった。

6-2. 平面形式の変遷

間取り調査および痕跡より作成した7棟の復原図を建設年代順に図10に示す。

(i) 18世紀前半～18世紀後半

整形四つ間取りをとり、ドマ隣が広間1室となる。現在は共に、六つ間取りに改造されている。（例：2、3）

(ii) 19世紀前半

居室部分が増え、桁行5列、上手妻側2室の構成をとる。（例：5）

(iii) 19世紀半ば～明治期

明治19年の民家は上手妻側3室をとり、ドマ前隅に内ウマヤが見られる。（例：8）その後、ウマヤの突出が見られるようになる。（例：9、11）

明治39（1906）年の大火後に建設された新家（シンヤ）の事例は分家のため規模が小さく、他民家とは違った間取りが見られた。（例：10）やはり大火後に建てられた例では、総2階として居室の充実を計っている。（例：9）

7. まとめ

葦崎市4集落民家の特徴として、ほとんどの民家の屋根形式が切妻だった。

また、養蚕を行っていた民家が多く、2階で行う他に、養蚕の専用付属棟や、3階建ての養蚕の主屋も見られた。

平面形式の特徴として、梁間が3.5～4間程と短いのに比べ、桁行が9～9.5間程と長い民家が多い事がわかった。また、道に沿ってウマヤの突出（つや）がみられ、民家がまちなみの景観をつくりだしていたと思われる。

北宮地では参道に桁行方向が平行になるように民家が立ち並び、1棟ごとの間口が狭く、他の集落とはやや違う民家が見られた。

先行研究より、桁行8間・梁間4間程度の民家は階層的に上層民家であったとある。また付属屋の数も多いことから、葦崎市神山地区には上層階級の民家が多く存在している事が明らかになった。

参考文献

- ・関口欣也「山梨県の民家」
- ・山梨県教育委員会編、第一法規（1982）
- ・小俣友香「山形県笛吹市芦川町の民家集落について——平面形式の変遷における民家の分析——」
- ・2008年度芝浦工業大学卒業論文
- ・山梨県笛吹市芦川町の茅葺民家集落——配置形態および平面形式による民家の分析——
- ・2007年度芝浦工業大学卒業論文
- ・山梨県笛吹市芦川町の茅葺民家集落——屋根形態および架構方式による民家の分析——
- ・同上
- ・佐々山浩「山峡地域における集落形成過程と住居形態に関する復元的考察——山梨県笛吹市芦川町を対象として——」
- ・2008年度東京理科大学大学院修士論文
- ・葦崎市オフィシャルホームページ <http://www.city.nirasaki.lg.jp/>

表5 編年指標

年代	17世紀後半	18世紀前半	18世紀後半	19世紀前半	19世紀半ば～明治期
柱	柱	柱	柱	柱	柱
側柱一間ごと	側柱一間ごと	側柱一間ごと	側柱一間ごと	側柱一間ごと	側柱一間ごと
側柱高	8尺～10尺程	7尺～12尺程	11寸～12寸程	切妻・入母屋・寄棟が分布	切妻・入母屋・寄棟が分布
梁	立体的な梁組	一面に平らな梁組	切妻・入母屋・寄棟が分布	素屋造	一部民家を除き一般化
屋根形式	切妻・入母屋・寄棟が分布	切妻・入母屋・寄棟が分布	切妻・入母屋・寄棟が分布	素屋造	一部民家を除き一般化
下屋造	下屋造	下屋造	下屋造	素屋造	一部民家を除き一般化
梁下げ・桁上げ	なし	なし	なし	なし	一部民家を除き一般化
上二階高	5尺程	6～8尺程	6～8尺程	6～8尺程	6～8尺程
部材種類	柱・檼・梁	柱・檼・梁	柱・檼・梁	柱・檼・梁	柱・檼・梁
部材仕上げ	手斧仕上げ	鉋仕上げ・一部手斧	鉋仕上げ・一部手斧	鉋仕上げ	鉋仕上げ
突き上げ屋根	なし	鉋仕上げ・一部手斧	鉋仕上げ・一部手斧	鉋仕上げ	鉋仕上げ

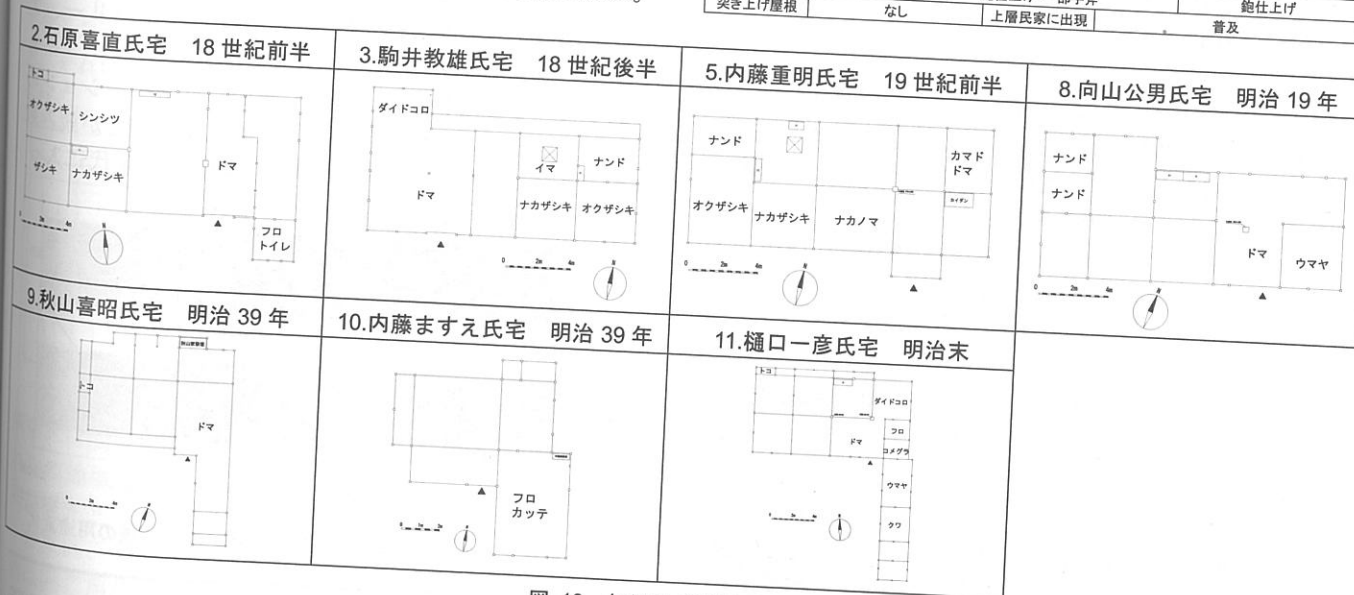


図10 年代順 各棟復原図